

2018 年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞受賞

「大矢田ひんここ」と喪山信仰

文学部 2 年 山中 海瑠

「大矢田ひんここ」と喪山信仰

1. はじめに

「大矢田ひんここ」(以下、「ひんここ」という)とは、岐阜県美濃市大矢田の天王山に鎮座する大矢田神社で500年以上前から続く伝統的な神事芸能である。「ひんここ」は、素朴なからくり機能を有する巨大な杖頭人形を用いた芸能であり、人形芸能の古態をとどめたまま現在まで継承されているため、非常に文化的価値が高い芸能である。その価値に反して、「ひんここ」について扱った先行研究は非常に少なく、そのほとんどは「ひんここ」の持つ神事的意味を、芸能に登場する須佐之男命¹に繋げて考えるにとどまっている。しかし私は、大矢田における一年間のフィールドワークを通して、「ひんここ」は天王山からおおよそ南方1kmにある記紀神話²の旧跡、喪山と密接に関係した芸能であると考えに至った。本論文では、フィールドワーク、神社の文献資料、さらには古典物語文学の調査を通じて得た文化人類学的知識と日本文学的知識とによって、「ひんここ」が喪山といかに強く結びついているかについて論ずる。

2. 「大矢田ひんここ」とは何か

2-1. 背景

まず、「ひんここ」が具体的にどのような芸能であり、なぜ一般的に須佐之男と結びつけて考えられるかについて見ていく。「ひんここ」は人形劇の体裁をとった神事芸能であり、その主題は「八岐大蛇神話」に取材している。八岐大蛇神話とは、記紀神話における須佐之男にまつわる神話の一つである。記紀の記述を要約すると次のようになる。

- ①須佐之男は高天原を追放された後³、美しい娘を間に泣く老夫婦に出会う。この老夫婦は、大山津見神の子神・足名稚命と手名稚命で、娘は櫛名田比売といった。
- ②須佐之男が泣いている訳を問うと、八岐大蛇が毎年やってきて夫婦の娘を食い殺すといひ、ついに今年も末子の櫛名田比売が食い殺されてしまうからだと明かした。
- ③須佐之男は、櫛名田比売を娶ることを条件に八岐大蛇を退治すると約束した。須佐之男は八岐大蛇を泥酔させるため、強い酒を老夫婦に作らせた。
- ④ついに八岐大蛇が現れるが、この酒を飲んで眠ってしまう。須佐之男は十拳剣で八岐大蛇を切り刻み、退治した。
- ⑤このとき、切った大蛇の尾の中から巨大な太刀が現れたので天照大御神に献上したが、これが三種の神器の剣「草薙之太刀」である。
- ⑥こうして須佐之男は櫛名田比売を救い、妻とした。

この物語は、大蛇を水神、櫛名田比売を稲田の神とみることにより、水害を鎮めて稲の豊作を約束する神話であるという解釈ができる⁴。実際に、この神話に取材した「ひんここ」も、五穀豊穡を祈願して奉納される芸能である。とはいえ、「ひんここ」で豊穡を祈るのは稲ではなく、麦である。大矢田の土地は堅く、稲作に適さないため、古くから麦作が行われていた。したがって、日本の神事が稲作を中心に展開するのに対して、大矢田の神事は麦作を中心に

展開していった。稲作のサイクルを反映した日本の神事では、春祭(祈年祭)で豊作を祈り、秋祭(新嘗祭)で豊穰を感謝する。しかし、麦蒔きは秋に行くため、これとは反対に大矢田では秋祭で豊作を祈るのである。こうした背景から、「ひんここ」は麦蒔き神事といわれ、秋に盛大に行って麦の豊作を祈る芸能であった。しかし、戦後に他地域と同じように春祭として執り行うことになり、その本来の目的とは違った形で継続されている⁵。

2-2. 舞の人形

「ひんここ」の主題は八岐大蛇神話にあると述べたが、次に、実際に「ひんここ」がどのようなストーリーで進行するのか見ていく。まずは、登場する人形についてであるが、「ひんここ」には全部で「猩々姫」(櫛名田比売)・「祢宜殿」(神主/須佐之男)・「軍配持ち」(庄屋)・「火種持ち」二体・「鍬持ち」二体・「肥料持ち」二体・「種持ち」二体・「土掛け」二体・「弁当持ち」・「大蛇」・「竜」の11種16体が登場する。

「猩々姫」は櫛名田比売の役で、重要な存在と考えられており、ひときわ精巧に作られている。古来毎年これらの人形は祭の後に燃やして作り替えてきたという⁶が、「猩々姫」は燃やさなかったという。「ひんここ」の舞処は下段と上段に別れていて、「祢宜殿」や「大蛇」、その他の農人形が舞うのは下段であり、「猩々姫」はその上段で舞う。姫は屋形から滝に釣り竿をさげて鯛を釣ろうとするが、「竜」はそれを妨害し姫を食おうと滝を昇降する。「祢宜殿」は祭場を祓う神社の神主と須佐之男の二つの役柄を務める存在で、人と神の二面性を持った存在である。「軍配持ち」から「弁当持ち」までは麦蒔きをしている農民の成人男性を表わしており、彼らが麦を蒔いているところに「大蛇」が現れる。

「軍配持ち」は庄屋であって、麦蒔きを統率する農民のリーダーである。「火種持ち」は生活において欠かすことのできない火を持つ役であるといい、この火には聖なるものとしての性格も込められている⁷。

「鍬持ち」・「肥料持ち」・「種持ち」は名前の通りそれぞれ鍬・肥料⁸・種を持っているが、この鍬は大矢田の堅い畑を耕すために細長く先が鋭くなっている。「弁当持ち」は頭の上に弁当箱を乗せており、性別こそ違うけれども、室町時代の行商人である大原女や桂女に似ている。「祢宜殿」と麦を蒔く農人形は案山子によく似ており、実際に地元では案山子であるといわれている。地元の話によれば、案山子を使っているのは農民が自分たちの財力・技術力で運営できる祭りにするためであり⁹、また案山子が農民にとって非常に馴染み深かったからだという。案山子の頭と胴体は竹籤の籠に美濃和紙を貼り付けて山柿から得た柿渋を何度も塗って作られており、袴や着物は地元の絹や木綿から手作りされている。

「大蛇」は八岐大蛇神話での娘たちのように農民を次々と食らっていく。この大蛇は尾の先に剣のような銀色の突起がついているのが一番の特徴である。これは前述の剣を思わせる装飾だ。大蛇の頭部は非常に平べったく、パカパカと口が開閉するようになっている。この仕掛けによって大蛇は農民を食らうのである。

2-3. 進行

「ひんここ」が始まると、まず神主役である「祢宜殿」が神紋のついた烏帽子を冠り大麻

を持って祭場と参列者を祓う。祓の儀式が人間の神職ではなく、神主の人形によって行われる点もひんここの特徴である。

「祢宜殿」は囃子に合わせて大麻を左右に振りながら舞い踊る。この囃子はひんここを通してずっと変わらない。太鼓・摺鉦に合わせて笛が「ヒンココ、チャイココ、チャイチャイ¹⁰⁾」と吹くと、人形を操作する男たちは「ホーイ」と声をあげる。ひたすらこれを繰り返すのである。人形の舞い方も囃子と同様にずっと変わらない。「ヒンココ、チャイココ、チャイチャイ」に合わせて左右に人形を振り、「ホーイ」で上に掲げるといふ動作の連続である。しかし、ひんここ祭り保存協会の方によると、これらの囃子・舞には、何回目の「ホーイ」で人形が特定の行為をするかという厳密な決め事があるといい、例えば、「祢宜殿」の舞は何回目の「ホーイ」までであるか、「大蛇」は何回目の「ホーイ」でどの農民を食うかなどは決まっている。また、場面が切り替わる際には、笛の「ヒロロヒロロロ」という音によって囃子が区切られる。

「祢宜殿」の祓が終わると、次は農民と大蛇の舞が始まる。農民たちが麦蒔きを演じているところに「大蛇」がやってきて、周囲を見回しながらどの農民から食べようかと見定める。

「大蛇」は一体ずつ農民の頭に噛みついて飲み込んでいくが、最後に「軍配持ち」を飲み込んで農民と大蛇の舞は終わる。農民と大蛇の舞は舞処の下部で行われるが、幕に区切られた舞処の上部では平行して「竜」が「猩々姫」を襲う場面が演じられる。つまり、ひんここは異時同図法的な手法をとって進んでいるといえる。しかし、農民を襲うものが「大蛇」であるのに対して、「猩々姫」を襲うものは「竜」と呼ばれ、名前が異なっているのは興味深い。

こうした混乱の場面に、今度は神主ではなく須佐之男役として「祢宜殿」が登場し、いよいよ須佐之男と大蛇の戦いの舞が始まる。大麻を持った「祢宜殿」は、囃子の「ホーイ」に合わせて大蛇に激しく体をぶつけて攻撃する。ただ、これは突進ではなく、手に持った大麻を振るい、その祓の力で大蛇を退散させようとしているのではないかと私は考える。ともかく、「祢宜殿」の攻撃によって「大蛇」は討伐され、「猩々姫」を襲う「竜」も倒れる。こうして「祢宜殿」と「猩々姫」—須佐之男と櫛名田比売—は堅く結ばれるのである。「大蛇」らを討伐した「祢宜殿」は須佐之男から神主に戻って、神輿を奉送するために静かに舞う。「猩々姫」は「竜」が駆逐されると、釣り上げた鯛を振り回しながら歓喜の舞を踊る。こうして還御する神輿が見えなくなると、「ひんここ」は終了する¹¹⁾。

3. もう一つの祭神

3-1. 喪山の伝承

ここまでで分かるように、「ひんここ」は前述の八岐大蛇神話を下敷きにした芸能であり、一見すると須佐之男を称えて奉納されているものだと思われる。実際に大矢田神社の祭神は須佐之男であるため、この考えは矛盾しない。しかし、大矢田神社にはもう一柱、非常に重要な祭神が祀られている。喪山に祀られた神、天若日子神である。「ひんここ」と喪山・天若日子神の関係を考察するために、まず喪山はどのような神話伝承の旧跡であるか、記紀神話の記述を見ていく。記紀の記録は要約すると次のようになる。

①高天原¹²⁾の天照大御神は、葦原中国¹³⁾に「天鹿兕弓」「天羽羽矢」¹⁴⁾を持たせた天若日子神

を派遣し、大穴牟遲神に国を譲るよう迫らせる。

- ②しかし天若日子神は大己貴命の娘・下照比売を娶り、葦原中国を我が物にしようと野心を抱いて八年経っても天に帰らないので、天照大御神は様子見に雉を遣る。
- ③雉を見た天佐具女は「この雉は奇妙である。射殺すべきだ」「鳴き声が不吉である」などと言い、天若日子神はそれに従って天から授かった弓矢で雉を射殺す。
- ④矢は神々の坐す高天原の天安河の河原まで届く。高木神は「この矢は昔私が天若日子に授けたものだ」「もしも天若日子に謀反の心があれば、この矢で死に、謀反の心がなければ無事である」と言って天から矢を返す。
- ⑤天若日子神はこの返り矢によって命を落とす。下照比売の泣声は高天原まで至り、息子の死を悟った父神・天津国玉神は喪屋を作り八日八夜殯をあげる。
- ⑥天若日子神と生前親しかった阿遲鉏高日子根神が弔いにやって来るが、容貌为天若日子神と非常に似通っていたため、「我が君は生きていたのだ」と親族は縋り付く。
- ⑦友情によって訪れたにも関わらず、穢れた死者と間違えられたことに腹を立てた阿遲鉏高日子根神は、喪屋を切り伏せて蹴り飛ばし、天に飛び立つ。
- ⑧この喪屋が落ちて積み重なって出来たのが、美濃国の喪山である。

最初に述べた天王山南方の喪山は、この神話に登場する喪山の旧跡であると考えられている。¹⁵実際に大矢田には、喪山神話に関する地名が多く残っており、関係する神々を祀った神社も多い。『新撰美濃志』¹⁶には、大矢田という地名は巨大な矢が落ちたことに由来し、大矢田南西の渡来は天羽羽矢の渡り着いた地の意味であり、東南笠神村の雉射田は射殺された雉に由来するという伝承が記されている。さらに、大矢田の東方藍見の誕生山には、天佐具女を祀るとされる誕生神社が、笠神村には下照比売・阿遲鉏高日子根神らを祀る上神神社(『美濃国武儀郡神名帳』¹⁷における瘡神明神)がある。

3-2. 大矢田神社と喪山信仰

このように、大矢田一帯は喪山を中心とした喪山信仰の空間であったといえる。実際に、大矢田神社の縁起も、この喪山に祀られた神・天若日子神と密接に関係している。弥勒院住職が天王山の古記録や村人らの口伝と「日本神代等之神書」を参考に元禄七(1694)年に執筆したものを、年は未詳であるが、禅定寺極楽坊(天王山禅定寺の一施設)の智栄法印が舎衛寺の智政に書き写させた『大矢田村天王山禅定寺記』によれば、縁起は以下のようなものである。

- ①喪山は天若日子の廟所で、大矢田の地名は「返り矢」が落ちたことに由来する。
- ②孝霊天皇の時代に山に悪龍が棲みつき村を荒らすので、困り果てた村人は喪山の天若日子神に祈った。すると天若日子神は須佐之男を祭るよう神託を出し、村人皆が同じ霊夢をみた。
- ③八岐大蛇伝承もあるので、須佐之男を天王山に祀るべきだという意見が出る。すると喪山が鳴動し、神人が出現。悪龍を退治する。
- ④神人は、「自分は須佐之男である」と明かして里の守護を約束。村人は天王山に祠を建立し、一帯の鎮守神とした
- ⑤養老二(718)年に泰澄¹⁸がこの社に参籠して厚く尊仰し、天王山を開基し、七堂伽藍を有

する天王山禪定寺を開いた。その社頭は「牛頭天王社」¹⁹と称された。

⑥慶長年間、里人はそれまで六月と九月の二回行われていた大祭を九月八日の一度のみにしたため、神は怒り、喪山が鳴動。里人は喪山山上に神明社を建てて謝罪した。また、神事の際に近隣の村から二羽の矢が奉納されるが、これは天若日子が雉を射た神話に基づくものである。

この伝承を整理すると、まず、村を苦しめた悪龍は天若日子の神託によって顕現した須佐之男によって討伐されている。つまり、天若日子の神恵によって、天王山に須佐之男が祀られたのである。したがって、その創祀は天若日子なくては成り得ず、このことは天王山禪定寺を喪山宗教空間の一部とみていることを反映すると考えられる。さらに、それだけにとどまらず、一帯で信仰されていた喪山の神・天若日子が具体的に人々に対して神恵を与えた場所が天王山の悪龍討伐であり、この天王山は天若日子の「神恵の地」として聖地的な位置づけがされているといえる。よって、天若日子の「廟所」という〈静の空間〉であった喪山に対して、実際に神恵を与えた〈動の空間〉として天王山を捉えることができる。喪山信仰はこの喪山と天王山という静と動の二つの山によって成り立つのであり、喪山と天王山は同列の聖地であったといえる。

次に、こうして、天若日子の動的なはたらきを表象する山として位置づけられた天王山に、泰澄は禪定寺を開く。これにより、〈動の空間〉であった天王山は修験道の霊場として整備され、修行の場になり、今に至るのである。最後に、年に二回の祭を年一回に減らしたために神が怒り、喪山が鳴動したとある。ここで、怒った神は喪山の神であったことに注意したい。つまり、当時の大矢田で執り行われていた年二度の例祭は、天王山の神ではなく喪山の神に奉納する意図が大きかったのである。

この例祭こそが、「ひんここ」を奉納する大祭であり、今も大矢田神社で行われているものだ。したがって、「ひんここ」はその起源として、喪山の神に対し感謝を表明する舞であったということが分かる。実際に、現在は「ひんここ」の芸能が終了した後、還御する神輿から参詣者に矢が撒かれる。これは、かつては神輿に向かって参詣者が投げる風習であったようで、『美濃国名所旧跡和歌集并画』や『大矢田村天王山禪定寺記』に記述がみられる。この風習がかつてと矢を受ける対象が逆転して続いているのは、地元の話によると、近年になって神輿に矢を投げるのは恐れ多いことであるという反対意見が出たからだという。確かに、神輿に矢を射かける行為は一般に神罰に当たる禁忌だと考えられていたようで、『平家物語』では神輿を担いで強訴する僧兵が「神輿に矢を射ると血反吐を吐いて死ぬ」と武士を脅す場面がある。神輿に矢を投げつけるというタブーのようなこの行為は、神輿に乗った神が天若日子神であるからこそ許されたものであろう。この行為は、「返り矢」の伝承を再現したものといえるからだ²⁰。

3-3. 神の性格と神事芸能との連関

いま、天王山の神恵は天若日子によるものであるから大矢田神社では天若日子が祀られていて、「ひんここ」も天若日子に奉納したものであると述べた。それでは、天若日子には他にどのような性格が見られるのか、物語文学の世界もふまえながら分析する。

『うつほ物語』では、琴を作る木を植えるために谷を採掘し、成長した木で琴を作る神として天稚御子が登場する。この天稚御子とは天若日子のことである。さらに、『狭衣物語』においては、狭衣中將の笛の妙音によって天降った天稚御子は、笛の名手である中將を天に連れて行こうとする存在として登場する。これらの物語における天若日子(天稚御子)は、明確に音楽神としての性格を有している。天若日子は、高天原に反乱した逆臣としてだけではなく、楽器を作り出し、美しい音楽によって降臨し、演奏者を天に連れて行く神であると、物語文学の世界では認識されたのである。こうした音楽神的性格は、祭りにおける芸能を愛する芸能神的性格にも繋がるといえる。前述のように『大矢田村天王山禪定寺記』の慶長年間には、祭りを年一度に減らしたために天若日子が怒り、喪山が鳴動したとあるが、これも音楽を司る神としての性格を反映しているといえる。「ひんここ」は舞楽であって、音楽と共に奉納される。音楽を愛する天若日子を「ひんここ」によって和ませることで、天王山の神恵に対する感謝を表明したのだと考えられる。

さらに、「ひんここ」は五穀豊穰を祈った芸能であるといったが、天若日子にもこうした豊穰を約束する性格があると考えられる。喪山伝承において、天若日子は阿遲鉏高日子根と混同された。この神は名前の通り「鉏」の神であり、農耕に関係していると考えられる。また、山上伊豆母も指摘するように、怒って喪屋を破壊して天に帰る描写には雷神としての性格が見受けられる(山上、1970、p.8)²¹。雷神は、同時に豊穰神でもある。「稲妻」という言葉があるように、天から落ちる雷は、穀霊に生命を吹き込み、豊作を約束すると考えられており、そうした雷を司る雷神が豊穰神と同一視されるに至ったのである。

4. おわりに

ここまで述べてきたことから、「ひんここ」に関する新しい解釈が可能である。従来「ひんここ」は“水神である大蛇を鎮めて豊穰神である櫛名田比売を救った神事を実演することによって豊穰を祈願する芸能である”と考えられてきた。しかし、喪山信仰と天若日子の性格を考慮すると、「ひんここ」は“里人の信心に答え、須佐之男による悪龍退治という神恵をもたらした神であり、同時に音楽神/豊穰神としての性格を持っていた天若日子に芸能を奉納することによって、その神恵に感謝を表明して和ませ、五穀豊穰を祈念する”性格も同時に持っていたといえる。ただし、これは後者のみが正しいとは私は考えない。古来「ひんここ」は前者と後者の両方の考えによって奉納されてきたものであるが、芸能そのものが大蛇退治にのみフォーカスしているため、創祀に深く関わり、須佐之男と連座して祀られる天若日子という存在が次第に忘れられていった結果、前者の考え方のみが定説として流布するに至ったのではあるまいか。あくまで大矢田神社の主神は須佐之男と天若日子の二柱であり、その大矢田神社で奉納する「ひんここ」は須佐之男にのみ捧げられたものではないのである。「ひんここ」の主題は、大蛇退治を通じて、喪山と天王山の繋がりを、天若日子と須佐之男の繋がりを再確認することにあっただけだ。今後も、大矢田でのフィールドワークを継続していき、より多角的に「ひんここ」を考察していきたい。

-
- ¹ 基本的に神名は『古事記』の表記を採用する。ただし、八岐大蛇については一般的に用いられる『日本書紀』の表記を採用する。
- ² 記とは『古事記』、紀とは『日本書紀』のことであり、記紀神話とは『古事記』と『日本書紀』に収録された神話の総称。
- ³ 高天原での須佐之男は暴虐の限りを尽くす邪悪な神として描写されるが、地上に追放されて後は一転して「八岐大蛇神話」にみられるように英雄として描写される。
- ⁴ 古来より、蛇神は天・雨・海(アマ)を司る龍神、すなわち水神として理解されてきた。橿名田は別表記で奇稻田とも書き、稻田の神として理解される。
- ⁵ 地元では、本来の姿に戻そうという意見もあるが、一度変えてしまったものは簡単に戻せるものではなく、難航しているのが実情である。
- ⁶ 現在は、人形を作る技術を持った職人がいないため、燃やさずに丁寧に保管され、同じものが使われている。しかし、徐々に人形は経年劣化しており、2018年の「ひんここ」では須佐之男の頭部が芸能奉納中に破損するアクシデントがあった。
- ⁷ 「火種持ち」が持つのは煙管で当時の喫煙のたしなみを表すという説があるが、「ひんここ」の始まった室町時代は喫煙風習が庶民に根付いた時代よりかなり前であり、そもそも高価な嗜好品であったため、注5で述べるように、農民の素朴な芸能として執り行われた「ひんここ」の姿とも一致せず、疑わしい。
- ⁸ 灰が肥料であったため、灰の入った籠を持っている。
- ⁹ 芸能の起源としては、中世に興隆した大矢田紙市で財を築いた豪商が、都の芸能神事を見て、それを大矢田の里で実現可能な範囲で取り入れようとしたのだと地元では言われている。
- ¹⁰ 笛の音が「ヒンココ」と聞こえるため、この芸能を「ひんここ」と呼ぶのだという。他にも「貧子々(貧しい農民らの祭り)」「日子々(太陽神の子らの祭り)」などの説がある。
- ¹¹ かつてはこの後に人形を燃やす「奉焼の儀」があった。
- ¹² 神々の坐す天界。
- ¹³ 地上世界。大穴牟遲神(=大国主神)が治める。
- ¹⁴ 巨大な弓矢という意味。
- ¹⁵ 喪山比定地に関しては、18世紀成立の名所和歌集『美濃国名所旧跡和歌集并画』や、天保年間成立の郷土史家・河村内郷による『美濃喪山考』などに見られるように、大矢田説と垂井(美濃国不破郡垂井)説とが対立していた。しかし、本論文の主眼は喪山の比定にあるのではなく、大矢田における信仰の在り方を明かすことにあるため、ここではあくまで大矢田に神話旧跡とされた喪山があったと述べるにとどめる。
- ¹⁶ 尾張藩士・岡田啓による著作(1860年)。
- ¹⁷ 10世紀に成立した神名帳。美濃国武儀郡の神社と祭神をまとめる。
- ¹⁸ 白山を開山した修験道僧。美濃地方には泰澄開山の寺院が多くみられる。
- ¹⁹ 祭神は牛頭天王。牛頭天王とは神仏習合の神であり、祇園社に祀られる神。薬師如来・須佐之男と同一視される。蘇民将來說話の武塔天神・陰陽道の天道神とも同一視された。後の神仏分離まで、大矢田神社は「牛頭天王社」であった。
- ²⁰ しかし、なぜ祭りの最後に、天若日子神を再び死なせる必要があるのかという点は大きな問題である。これについては今後の考察対象としたい。
- ²¹ 山上伊豆母「味耜高彥根神と神戸剣」『神道学』神道学会 65号昭和45による。

[参考文献]

清水昭男(1996)『岐阜県の祭りから』一つ葉文庫

山田清(1986)『ひんここ祭：敬神尊皇の伝統』大矢田神社社務所

羽賀祥二(1998)『史蹟論 19世紀日本の地域社会と歴史意識』名古屋大学出版会

山上伊豆母(1970)「味耜高彥根神と神戸剣」『神道学』65号 神道学会

勝俣隆(1997)「「天稚御子像」の変遷に関する一考察 — 「天若日子」から「天稚御子」へ—」『長崎大学教育学部人文科学研究報告』55 pp1-17

中野幸一校注・訳(2002)『新編日本古典文学全集 うつほ物語』小学館

阿部秋生校注・訳(1996)『新編日本古典文学全集 狭衣物語』小学館

市古貞次校注・訳(1994)『新編日本古典文学全集 平家物語』小学館